

# 江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。全く管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

編集長 昆 吉則

## 土を作れば作物は勝手に育つ。を語る「土の匠」

この雑誌を始める二十数年前、筆者はスガノ農機(株)の前社長、菅野祥孝氏や同社営業マンたちと全国の篤農家を訪ね歩いた。プラウメーカーであるスガノの営業方法は農機業界にあつて極めて異色だった。

農機業界の流通は、大手トラクターメーカーが系列化した販売会社や農協系統ルートを通じて営業・販売されるのが一般的だ。スガノも伝票はそのルートを通すのだが、同社の場合は営業マン自身がこれとは思う見込み顧客を直接訪ねていた。畑作が主流の北海道はともかく、水田農業が中心でトラクターとセットで販売されるロータリーでのかくはん耕が標準技術になっている府県でプラウの価値を伝えることは、トラクターメーカーや販売店任せでできることではなかった。それと同時に、当時はプラウとサブソイラーという二つの「土作業機」に商品を限定して農業者とともに「土を考える」ことを通して自らの企業を成り立たせようとしてきた同社の理念が、営業というお客様との出会いを人任せにすることはできなかったのだ。

当時の同社の営業は、新聞や雑誌の広告に反応してきた農家を訪ね、ひたすら「土」、あるいは「土と農業」を語り合うことだった。筆者から見れば土と農業を語る宣教師といつてもよい前社長だったが、同氏はいつも「農家に学べ」と言い続け、篤農家の言葉に耳を傾けた。

そのころのスガノの営業マンたちは、その価値を理解する農家がいるも、田にプラウを入れると、地主たちから「田んぼが壊れる」と言われ、プラウで畔際に溝ができることを「どうしてくれる!」と批判された。しかし、プラウ耕を続ければこそ土質が均一になり、同社によるレーザレベルの開発と営業によって、今ではそうした批判も少なくなつた。それどころか、水田といえどもプラウなどの畑作業機が導入されることによって、無代かきの乾田直播が実現するのみならず、本誌が主張するトウモロコシを含めた水田農業イノベーションともいえるべき水田経営の可能性も生まれてきたのだ。

そんな時代に、筆者は菅野祥孝氏と茨城県牛久市のダイコン農家、鈴木茂氏を訪ねた。そのとき、鈴木氏はこう言った。

「作物は、作るのではなく、育つ。土を作れば作物は勝手に育つ。農家の仕事とは作物が育つ条件を整えること」

まさにそのとおりだ。そして、それは全国各地にいる篤農家がその人なりの言葉で同じことを言う。

まさに、土とその土地の風土を追求した末に出てくる「土の匠」の言葉である。「匠」とは「職人」である。しかし、それは「経営者」としての言葉に通じる。農業も経営も、基本は「土」、あるいは「お客様」に戻し続けることで成り立ち、しかもそのためには共に働く者への責任が伴う。そして、突き詰めると農業も経営も、ままにならない自然やマーケットに対しての危機管理だと思つた。「土を作れば作物は勝手に育つ」という鈴木氏の言葉もそれに通じる。

スガノ農機は、各地の農業経営者の営みを映像作品として紹介する「ヒューマンドキュメンタリー」を毎年制作している。その第11弾の表題は「土の匠」。「土の匠」として紹介されているのは、岩手県の庄司有弘氏(長芋の匠)、北海道の吉本博之氏(畑作の匠)、岡山県の東内秀憲氏(黒大豆の匠)の三人。

シリーズの中でも最高傑作と言つてよい作品である。一人でも多くの方にご覧いただきたい。